

コラム

セクシーな男たちを育てよう

(東京大学名誉教授)

吉田 邦夫

新型コロナの感染拡大後、ドイツのメルケル首相を筆頭に多くの国の指導者の支持率が軒並みに上昇した。例外なのがトランプ大統領と安倍首相である。日本は感染者数がある程度抑制されて、海外では「ジャパン・ミラクル」とも評されているが、安倍首相はアベノマスク以外何をしたのかが明確に伝わってこない。危機下におけるコミュニケーションの肝は「どう情報を伝え、リスクをマネージするか」にある。その点で、メルケル首相は、専門家の話をよく聞いた上で、政策を立案し、悪い点も含め、自ら正直に話したところが国民に安心感を与えた。

危機管理における科学と政治の関係がどうあるべきかについては、2011年の福島原発事故でも議論された重要課題である。残念ながら、その経験が今回のコロナウイルス対策に生かされているとは言い難い。

初期の感染制御に中心的役割を果たした旧専門家会議は、政治との距離や情報発信のあり方が批判された。その反省から生まれたのが、新たに設置された専門家の助言組織である対策分科会であるが、分科会の助言に基づくとされる政策設定の過程は、むしろ前よりも一層見えにくくなった印象がある。

メルケル首相の演説を読んで欲しいと京大の吉田英生教授にメールしたところ、返礼に塩野七生の随想集「男たちへ」から第28章「インテリ男はなぜセクシーでないのか」が送られてきた。勿論、ここで言うセクシーさは007のボンドのような男ぶりを意味するものではない。塩野氏は日本のインテリ男にはいくつかの特徴があるとす。まず、俗に言う知的職業についている。次にご立派とは言えないまでも身体はまあまあイイ線をいっている。そして、そここの経済力もあると言う。これらの好条件が揃っているのに、何故に女性たちに男達が魅力的に見えないのであろうかと問題提起をする。

彼等は、毎日のように新聞紙上に書きまくり、テレビでしゃべりまくっている。しかし、一体全体、何を考えているのか理解出来ないのである。それは、この男達が自

分自身の考えを述べるよりも「解説」することに熱心だからである。一見学問的に整理して述べるだけの人たち、すなわち「解説屋」がはびこる現状こそが日本の知的活動を墮落させている。

その上で、さらに重要な特徴に政治からのお声がかかると、みっともないほどに直ぐになびくことにある。利用されて自己満足しているだけの見苦しい振る舞いに、女性達は全く「マスラオ」の精神を感じられないと塩野氏は言う。コロナ会議でも旧専門家会議の解散も未だ宣言されない中に、分科会発足が発表されたが文句一つ言わずに委員を引き受けた尾身会長以下の人々の身の処し方は如何なものであろうかということになる。Go To トラベルの前倒しや東京除外処置のように、分科会に諮る以前に方針が決まっているように見えるケースが散見されても文句も言わないのである。

これでは政治が、経済重視の視点から政策を都合良く決めていくとの分科会への不信感が生まれてくるだけである。米国やブラジルでは大統領が科学者の助言を軽視し感染を拡大させている。科学者は国民からの信頼を得るには政治的判断に対して一定の線引きをし、中立性を維持する勇気が必要なのである。

明治以来、日本は西洋に「追いつき、追いこせ」をモットーに頑張ってきた。そして、正解を迅速に見出す優等生人材育成の教育に重点を置いてきた。しかし、本当の近代化は「主体性のある責任感を有した創造的個人」を生み出す教育があって為しうるのである。大企業で定年まで勤め相当額の年金を貰うことが、人生の目標である時代は終わろうとしている。にもかかわらず社会に出てからも新しいことを学び直しが出来る社会システムは殆ど未確立の状態にある。今こそ75歳まで高い生産性を持って働く「稼ぐ力を有した個人」を育てるリカレント教育が必要である。その際に、P2Mは重要な分野として認知されるべき概念であり、私達は自立した意見を持った「セクシーな若い男たち」を沢山育てていくことを目指そうではないか。

2020年8月1日 受理